9月まき野菜の栽培

【キャベツ】

秋まき品種（主な品種は「金系201号」「YR青春」など）を使用し、は種適期は9月20～25日です。キャベツは一定以上の大苗で越冬すると、抽だいしやすくなります。そのため、無理な早まきでは大苗になり抽だいしやすく、逆に遅まきでは外葉が充分育たず小玉になります。プラグ育苗する場合は、128穴トレイを使い、本葉3～4枚で定植します。

地床育苗の場合は、条間6～7㎝に条まきし、本葉7～8枚で定植します。は種時は、べたがけ資材等を活用し発芽を揃えます。

11月中下旬に、うね間60㎝×株間40㎝で定植し、1回目の追肥は定植後25日目頃に、2回目は結球開始前に、畝間に施し中耕して土寄せします。

収穫時期の5月は生長が早く、過熟による裂球をしやすいですので、適期収穫を行います。

【ダイコン】

秋まき品種（9月上旬まきは「YRくらま」など良品質なもの、中旬まきは「秋王」など、す入りが遅く裂根しにくいもの、干し用は「耐病干し理想」など）を使用します。

うね幅60㎝×株間25㎝で1カ所3粒まきとします。は種当日に畝立てすると、土壌湿度が確保され発芽がそろいます。本葉5～6枚頃までに1本に間引き、間引き後に1回目の追肥を、その3～5週間後（収穫予定の30日前）に2回目の追肥を行います。

肌が汚くなる原因はいくつかありますが、最も多いのがキスジノミハムシによる害です。これは生長のごく初期に加害しますので、は種時にフォース粒剤を施用して防止します。

す入りは一種の過熟現象で、急激に肥大する根部に比べ、地上部の割合が小さいと発生しやすいため、適期に収穫します。裂根は、生育期間中に乾燥が続き、その後大雨が続いた場合など、土壌水分の急激な変化により発生しやすくなるので、乾燥防止のため敷きワラ等を使います。キスジノミハムシ・す入り・裂根の回避策は、カブの場合も同様です。

【タマネギ】

青切り用、普通種、貯蔵用（それぞれ「マッハ」「ターボ」「アース」など）があるので、それぞれを播いておき、収穫・販売期間を伸ばすことをおすすめします。

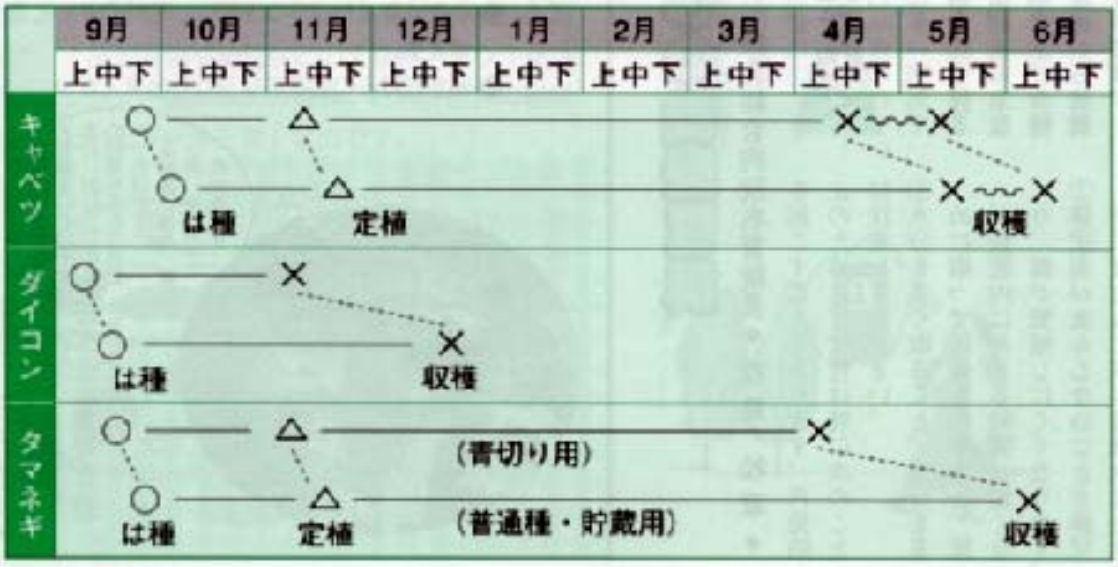
は種適期は、青切り用がやや早めの9月上中旬、それ以外は9月中下旬です。発芽力が弱いので、覆土は種子が隠れる程度とし、は種後くん炭などをかけておきます。

早まきの大苗を定植すると、抽だい・分球しやすくなり、逆に遅まきの小苗を定植すると、寒害を受けやすく、小玉になりやすくなります。

は種後50～60日頃に、うね間20㎝×株間12㎝で定植します。苗の目安は、太さ7～9㎜、重さ5～7gです。追肥の1回目は定植後30日頃に、2回目は2月下旬に施します。貯蔵用の場合、遅い追肥をすると貯蔵性が下がるので、3月以降の追肥はしません。

貯蔵する場合は、葉が6割程度倒れた晴天日に収穫し、充分乾燥させた後、風通しの良い所に束ねてつり下げておきます。

【ネキリムシの防除】

キャベツ・ダイコン・タマネギとも、発芽直後の幼苗の茎が切られることがあります。これはコガネムシやネキリムシによる被害です。は種予定地の雑草を充分に防除し、は種時にダイアジノン粒剤を散布して防止します。

これらのほかにも、ホウレンソウやコマツナ、ミズナなどが9月にまけますので、直売向けにもぜひ栽培してみてください。